

重要文化財トピック展示

「朝倉館の茶の湯と香道」展示解説シート

平成 25 年 11 月 14 日（木）～平成 26 年 1 月 14 日（火）

一乗谷朝倉氏遺跡では、城下町の都市構造を解明するための調査を、継続して行っています。継続的な発掘調査の結果、約 170 万点の遺物が出土し、そのうちの 2,343 点が国の重要文化財に指定されました。

より多くの出土遺物を公開するため、今年度よりコーナーを新設し、発掘調査地ごとに重要文化財トピック展示を開催します。今年度は、当主館と推定される「朝倉館」に焦点を当て、国の重要文化財に指定された陶磁器を中心にご紹介します。

朝倉館跡 茶の湯と香道の品々

朝倉館跡は、朝倉氏最後の当主・朝倉義景が住んでいたと目される屋敷の跡です。昭和 43 年から始まった発掘調査により、10 数棟の建物や庭園などの遺構、そして当時の生活を物語る多くの遺物が見つかりました。

館跡の奥まったところには庭園や中庭があり、周辺には茶室や会所とみられる小規模な建物が配されていました。当時好まれた唐物からものを含めた茶器も出土しています。現在五島美術館に伝わる唐物茶入「本能寺文琳ぶんりん」は、かつて義景が所持し「朝倉文琳」と称されたもので、この館で、出土茶器とともに愛でられたことと思われます。また、館の外濠からは聞香札もんこうふだが出土して、香遊びを楽しんでいたことも分かりました。

第 2 回テーマでは、朝倉館の茶の湯と香道の品々の一端をご紹介します。これらの遺物とともに、展示室の復原模型や遺跡に残る屋敷跡から、朝倉氏当主の暮らしを想像してみましょう。



朝倉館復原模型

せいじわん
青磁碗 (重要文化財)

優れたロクロ技術で非常に薄く、滑らかに作られ、小さく、ひきしまった高台から、ゆるやかに胴を張ります。釉は淡い鶯色で、貫入はありません。

せいじわん
青磁碗 (重要文化財)

胴の外面に、片切彫りで蓮弁文を描いています。全体に丸みを帯び、口縁も丸くおさまります。釉はくすんだ緑色をし、貫入はありません。14世紀後半の品物です。

せいじわん
青磁碗 (重要文化財)

口縁の外面に、雷文帯を巡らせています。細い線刻を持つ碗よりも大振りです。14世紀後半～15世紀前半の品物です。

せいじわん
青磁碗 (重要文化財)

胴の外面に、細い線刻の蓮弁文を描いています。全体に丸みを帯び、口縁も丸くおさまる一乗谷では最も多く見られるタイプです。16世紀代の品物です。

こくゆうとうきわん
黒釉陶器碗 (重要文化財)

中国製の天目茶碗です。いずれも立ち上がり強く、口縁の返しの弱いものです。釉は漆黒で、1点はその上を柿釉が覆い、下の黒釉が筋状に流れています。

ちょうせんせいざつゆうとうきわん
朝鮮製雑釉陶器碗 (重要文化財)

低く削り出した高台から口縁に直線的に開く平茶碗で、いわゆる「蕎麦茶碗」と称する品物です。高台脇がわずかに膨らみ、これが見込の広い茶溜りの段となります。

てつゆうとうきわん
鉄釉陶器碗 (重要文化財)

瀬戸・美濃焼の天目茶碗です。中国製品を模して作られ、15世紀末ごろより大窯で大量生産されるようになります。大きさに大小があり、高台あたりに錆釉をほどこすものも見られます。

てつゆうとうきわん
鉄釉陶器茶入 (重要文化財)

瀬戸・美濃焼の茶入です。やはり中国製品を模して作られ、胴の扁平な形や、やや肩が張り胴長の「肩突」形の品物があります。

かぎ つげふた
鍵・付札 (複製)

館跡庭園に面する茶室の北側にある井戸から出土しました。鍵は銅製のものが5点、付札は檜製のものが2点です。付札の1点には「蟬之御たん寿のか記」、もう1点には「たん寿」と記され、箆筒の鍵に付けられたものと分かりました。

ふうろ
風炉 (重要文化財)

笏谷石製の風炉です。胴の上部が内湾し、口縁の上面を水平に作ります。肩部に楕円形の窓が開きます。

せいじこうろ
青磁香炉 (重要文化財)

いずれも筒形で、底部に3足を貼り付けています。1点は単純な筒形をし、内面の底部付近を除いて施します。もう1点は竹を輪切りにした形です。釉は外面全体と内面の口縁部に施され、内面の大半が露胎となっています。

はいゆうとうきこうろ
灰釉陶器香炉 (重要文化財)

瀬戸・美濃焼の香炉です。中国製品を模して作られています。いずれも筒形で、竹を輪切りにした形をし、底部に3足を貼り付けています。小形の1点は、節の表現を簡略化して、3本の沈線を巡らせています。